

平成 27 年度（2015 年度）

福島大学 FD 活動報告書
～大学教育改善の追求～



国立大学法人

福島大学
Fukushima University

2016 年 3 月

福島大学教育企画委員会

1. はじめに

平成 27 年度（2015 年度）の福島大学における FD 活動の全体を、ここにまとめてご報告いたします。

内容としては、FD 宿泊研修にはじまり、各学類・研究科の FD 活動の紹介、「教育改善のための学生アンケート」の集計結果等、昨年度とほぼ同様のものとなります。

FD は、広義には、教育のみならず、研究・大学の管理運営・社会貢献・キャリア開発等、大学教員に求められる資質・能力全般の開発を指しますが、今日では「教育改善」という狭義の意味で用いられることが一般的となっています。

この『福島大学 FD 活動報告書』においても、教育改善に焦点を絞って、全学的な FD として 1) FD 宿泊研修、2) 「教育改善のための学生アンケート」を、各学類・研究科の FD として 3) 学類・研究科の FD 活動を紹介しています。

『福島大学 FD 活動報告書』が「報告書」である限りにおいて、それぞれの活動に価値判断を行うことは適切でないと思われます。他方で、全学、各学類・研究科の多様な FD 活動には、相互に参照・共有すべき素晴らしい取組が多数存在しています。

この『福島大学 FD 活動報告書』を通して、福島大学で実践される多様な FD が発掘・共有され、福島大学における教育がより良いものへと改善されていくことを心より願っております。

福島大学教育企画委員会

目 次

1. はじめに.....	2
2. FD 宿泊研修	4
3. 授業公開・検討会	10
第1回授業公開	12
第2回授業公開	14
第3回授業公開	17
第4回授業公開	19
4. 各学類・研究科における FD 活動	21
人間発達文化学類	22
行政政策学類	23
経済経営学類	24
共生システム理工学類	26
5. 夜間主（現代教養）コースにおける FD 活動	27
6. 共通教育における FD 活動	45
7. 教育改善のための学生アンケート	61
前期集計結果	62
後期集計結果	80

2. FD 宿泊研修

平成 27 年度 FD 宿泊研修記録



平成 27 年度 FD 宿泊研修記録

🌈 テーマ：ふくしまに学ぶ教養～学生は地域から何を学ぶのか～

🌈 日 時：平成 27 年 9 月 26 日 - 27 日

🌈 場 所：二本松市岳温泉「陽日の郷あづま館」

🌈 FD 宿泊研修の趣旨と目的

FD 宿泊研修は、学生と教職員が一堂に会し、授業改善等の大学教育の質の向上について集中的に話し合う合宿の機会を設けることで、学生の声を取入れた大学づくりを進めることを趣旨としている。また、FD 宿泊研修では、普段交流することの少ない、教職員同士、教職員と学生、学生同士の交流の促進や、各々が大学をふり返り、自らの課題や成長に必要なことを確認する機会とすることも企図している。

🌈 テーマ「ふくしまに学ぶ教養」について

昨年度の FD 宿泊研修のテーマは「教養教育の ReDesign -1 年次必修科目から考える-」であった。福島大学で身につけるべき教養とは何か？という普遍的な問いからはじまり、様々な実践のアイデアが提案される中、とりわけ多かったのが方法論としての PBL であったと言えよう。

今日の高等教育においては、アクティブラーニングに代表されるような「学びの質的転換」と共振しながら、教室の中のみならず、大学の外での活動を通した学びの重要性もますます高まっている。そこで、今回の FD 宿泊研修は、PBL も視野に入れながら、「ふくしまに学ぶ教養」というテーマのもと、地域を志向・活用した学び（教養教育）について検討する機会とした。

🌈 スケジュール

☐ 1 日目

13:00～：趣旨説明

～14:00：話題提供

～18:30：個人・グループワーク

☐ 2 日目

9:00～：報告会

～10:50：ふり返りと共有

～11:00：閉会

FD 宿泊研修概要

□ 話題提供



福島大学 COC 事務局地域コーディネーターの高橋あゆみ氏から、COC 事業の取組、及び COC 版のルーブリック（評価 GLidD）等について話題提供をいただいた。

福島大学における COC では、「ふくしま未来学」という特修プログラムにおいて地域課題を実践的に学ぶ科目群を展開している。

このような PBL 型・実践型の学修における成果をどのように可視化していくかについての知

見を共有した。



次に、弘前大学 COC 推進室助教の西村君平先生に弘前大学における地域志向教育について話題提供いただいた。

弘前大学では、地域志向教育を設計するにあたって、まず「地域を」学ぶか、「地域で」学ぶか、また、その学びの定着を「学問による統合」に求めるか、「経験による統合」に求めるかが議論になったという。暫定的な方針としては、「地域で学び、経験により統合する」ということに

なり、具体的な実践は「キャリア教育」の中で展開されている。

この際にも、ルーブリックが設計されたが、それは「評価ツール」としてというよりもむしろ、リフレクションや自己主導学修の支援ツールとしての性格が強い。ともすれば、「満足感の消費」につながりやすい経験学習を、どのように「大学における学び」として位置づけていくかについての知見を共有した。



最後に、元福島大学総合教育研究センター准教授（現：名古屋大学高等教育研究センター）丸山和昭先生から、続く個人・グループワークの方法について説明いただいた。

□ 個人・グループワーク

個人・グループワークでは、「ジグソー法」という手法を採用した。ジグソー法とは、協調学習等で用いられる手法で、大まかな手順としては次のようなものとなる。

- 1) まず、中心となる課題を決定する。今回は「ふくしまに学ぶ教養」である。
- 2) 次に、その課題を具板的で小さな課題に分解する。
- 3) 分解した小さい課題に合わせてグループをつくり、それぞれのグループが、それぞれの課題についてのエキスパートとなる（課題A：Aグループ、課題B：Bグループ等）。
- 4) それぞれのエキスパート（グループ）の知見を統合して、最初の大きな課題への対応策や発展的課題へと繋げる。



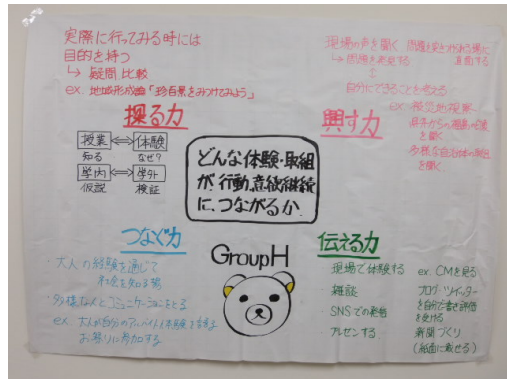
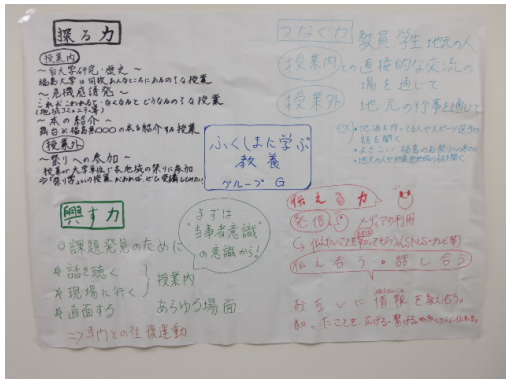
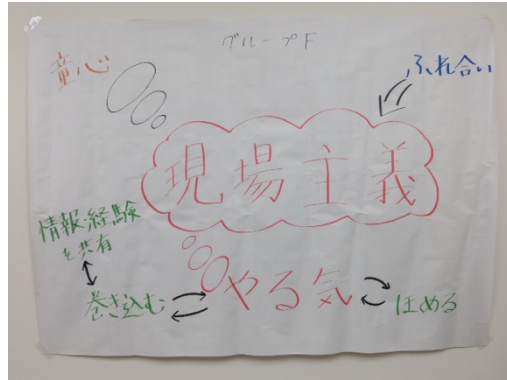
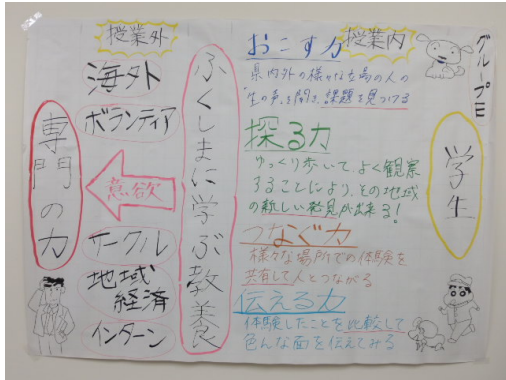
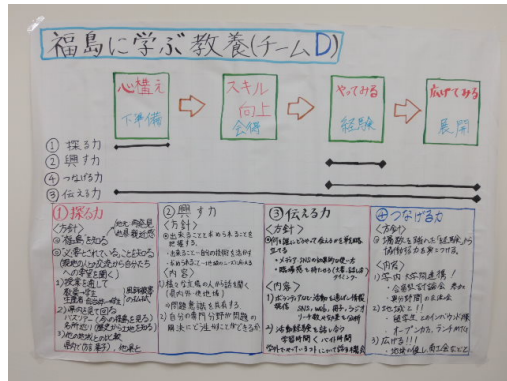
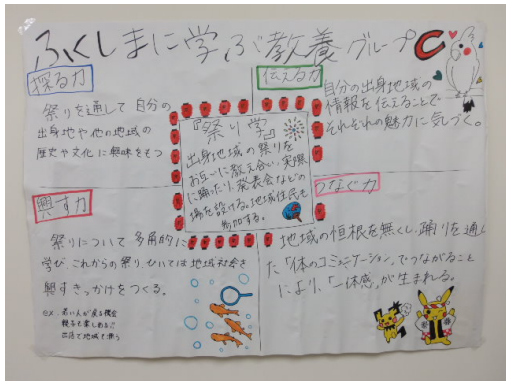
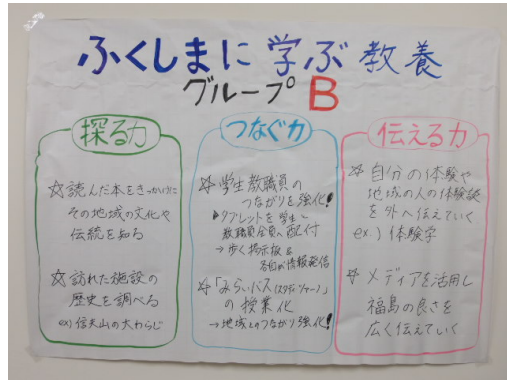
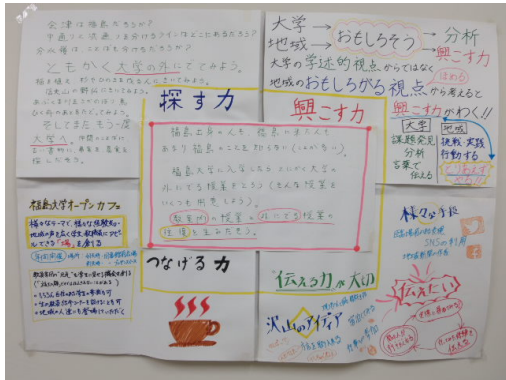
□ 成果と課題

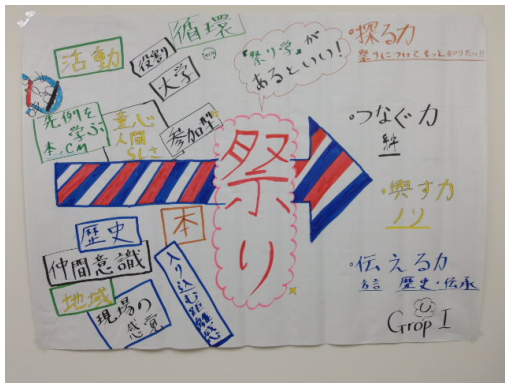
FD 宿泊研修における各グループのアイディアは、次頁に示す写真のとおりである。

大きくは、探る力、つなぐ力、伝える力、興す力を身につけるためにどのようなことが必要であるかを中心として様々なアイディアが提出された。とりわけ「祭り学」のアイディアは盛り上がり、「祭り」というイベントを通して、地域「を」学ぶことも、地域「に」学ぶこともでき、且つ、プロジェクト学習の要素も取入れられるのではないかと提案された。

他方、そのような科目を展開するための具体的なリソース等にまでは踏み込まず、「こういうものがあったら良いね」という希望に終止してしまったのは今後の改善点である。

❑ 各グループのアイデア





参考：報告の様子



3. 授業公開・検討会

FD ワークショップ 授業公開検討会



今年度の実施日程



第1回

日 程：7月6日（月）4時限（M-4教室）

担当者：阿内春生 先生（人間発達文化学類）

科 目：教育行政学

参観者：杉田先生、小野原先生、坂本先生、高橋（純）先生、丸山先生、高森先生
職員（3名）、計9名



第2回

日 程：10月14日（水）1時限（M-3教室）

担当者：菊地智裕 先生（経済経営学類）

科 目：ヨーロッパ経済論

参観者：神子先生、藤原先生、高森先生、職員（3名）、計6名



第3回

日 程：11月4日（水）1時限（M-24教室）

担当者：川端浩平 先生（行政政策学類）

科 目：地域社会学Ⅱ

参観者：神子先生、照沼先生、新藤先生、高森先生、職員（3名）、計7名



第4回

日 程：11月16日（月）3時限（人間発達文化学類棟 617（教育開発実習室））

担当者：平中宏典 先生（人間発達文化学類）

科 目：理科学習指導論C

参観者：浜島先生、鵜沼先生、職員（2名）、計4名



第5回

日 程：12月15日（火）1時限（L-2教室）

担当者：大橋弘範 先生（共生システム理工学類）

科 目：化学Ⅱ（物理化学）B

参観者：中山先生、杉森先生、神子先生、高森先生、職員（2名）、計6名

第 1 回授業公開

授業者からの報告.....

1～5 回	通常講義	最後に 15 分程度 GW で報告の準備
6～8, 10 回	中間報告	毎回の残り時間を GW で最終報告の準備
9 回	通常講義	15 分程度 GW
11～14 回	最終報告	<u>公開日は 13 回目</u>
15 回	報告書作成/まとめ	

本授業は教職に必要な科目のため教員免許取得希望の学生が多く履修している。54 名の受講生の内、所属専攻は人間発達専攻、文化探究専攻がほぼ半々で、スポーツ・芸術創造専攻の学生は 1 名である。発表グループは 9 グループで 3～6 人の学生で構成している。授業全体の構成は表の通り。

グループ分けは 2 回目の授業で実施した。ランダムにグループ分けをすることも考えられるが、本授業は授業時間外の打ち合わせが相当時間必要なため、人数の指定(本年度は 5 名以下)と報告に全員出席することだけを条件として、自由にグループを組ませている。こうすると、実習校種別、教科別に普段の友人同士で組むようになってしまうのだが、上述の理由からやむを得ないと考えている。

公開日は、中間報告時に学生同士で出された意見や、授業者(阿内)からのコメントを踏まえて最終報告をした。報告の「出来」自体には差が生じてしまうのはやむを得ないことだが、中間報告から改善が見られないグループはなく、グループワークの深まりを見て取ることができた。質疑では多くの学生が発言できるように、質疑の直前に「相談の時間」を本年度から設定したが、これによって、昨年度に比べて明らかに質問の挙手は増加した。一方、質疑の時間は回を重ねるごとにどうしても特定の学生が発言する傾向が強まってしまう。積極的に挙手する学生をおしとどめるわけにも行かず試行錯誤している。なお、「相談の時間」の設定によりこの点も明らかに改善し、挙手する学生はばらけたが、それでも全く挙手しない学生は 5 分の 1 ほどいる。



本授業を通じて、自ら課題を設定→調査→中間報告→修正→最終報告→修正→まとめのプロセスの中で「研究ってこういうことか」と研究設計の手順を学び取ってもらえればと考えている。昨年度の「子どもの人権」（本授業「教育行政学」と隔年開講で表裏）では、報告回数を1回としたため、十分議論を深められなかった。この反省をもとに発表回数を2回としているが、例えば100人規模の授業で同様の形式は難しく、54名の「教育行政学」の学生からも「受講制限すべき」という要望が出ていた。受講制限については検討中である。

同日、5限に他の授業があったため事後検討会を持つことができなかったが、授業後に頂いたFD参加者のアンケートではおおむね肯定的なご意見を頂いていた。もちろん、この形式での実践には問題点も多々ある。たとえば、「基礎的な知識の定着をどう保障するか、この点は重要である。本授業では最初に通常授業で、基礎的なことの確認を数回講義しているが、それだけでは基礎的な知識の全てを習得することは難しい。また報告にしても、本当に熱心に取り組むグループが大多数ではあるものの、ごく少数ながら「手抜き」がみられるグループが残ってしまっていることも否定できない。受講生全員が主体的に参加できる授業の設計をこれからも続けていきたい。



第2回授業公開

授業者からの報告.....

1. 授業計画

本講義の目的は以下の通り(2015年度シラバス+講義第1回イントロダクションで解説):

ヨーロッパ社会経済の現状を「危機」の時代と認識した上で、①「危機」を社会経済システムの矛盾の現出と捉え、そのような危険性を内包したシステムを構築した歴史的背景と、「危機」が表面化する過程を説明する。全体としては、19世紀以降の近代国民国家体制とそれを支える自由・平等などの理念が、現実の経済的諸現象(格差, グローバル化, 社会主義体制の崩壊など)と衝突し動揺している, という像である。各回, 特定の国・地域を取り上げて, 大きな論点と関連付けつつ基本的なデータと歴史を解説する。②ヨーロッパの状況をもって, 「現在のわれわれ」を取り巻く環境を参考する契機とする。



②については, 受講者にとって「遠い世界」であって距離感があると思われるヨーロッパ世界を, 比較論の視点から「近い・似た世界」と感じ取ってもらいたいという思いから導入した。また, 異国の現状を単なる情報に留めるのではなく, 自らの思考に応用可能な「知」へと繋げてもらいたいという思いもある。

講義内容は, 一般的関心が高まっている大テーマを3つ選び, 4回×3ターム(+補遺)で構成した:

第1タームの大テーマは「民族と宗教」で, 紛争, 難民・移民, EU離脱運動・分離独立運動といったトピックを取り上げる(国・地域としては, ウクライナ, フランス, スコットランドなど)。

第2タームの主題は「国家と政治」で, 福祉, 租税, 国家-市場関係を取り上げる予定である(スウェーデン・ノルウェー, ルクセンブルク・リヒテンシュタイン, ドイツ・フランス・イギリス)。第3タームは「資源と農業」で, 人的・物的資源, 環境, 農政・食糧(イタリア・ギリシャ, ロシア・ポーランド, ドイツ・フランス)。

大テーマの理解を深めつつ, 多面的に各事例の情報も蓄積する, というやや欲張りな構成である。

2. 授業公開当日の内容

公開授業当日は, 第1ターム1回めであった。全体としては第2回なので, 「広く浅い」

内容を心がけた（ターム毎に内容が高度になることは第1回で宣言してある）、ウクライナ騒擾を事例として、「民族と宗教」の経済的背景を考察する回である。

① まずはウクライナの基本情報（地理、人口、GDP など）を示した上で、2013 年末からの国際政治過程（市民デモからヤヌコーヴィチ大統領の追放とティモシェンコの解放、「親露派」との紛争、ロシアによるクリミア半島の併合）を解説した。

② しかしこれは現象であり、現象が生起した背景の理解が必要である：

- ・ ウクライナ国内の東西地域差（中・西部の農業と東・南部の工業）
- ・ 工業は 19 世紀からロシアによる開発投資の対象であり、20 世紀から軍需産業化した
- ・ 隣国ポーランドの EU 加盟後の経済成長
- ・ 「アラブの春」の影響（リビアからの原油輸入と穀物輸出の頓挫）

③ 複合的要因によって「ウクライナ人」と「親露派」の紛争が生じているのであって、単に「民族・宗教の違い」と言って解消されるものではない。換言すれば、紛争などの大きな出来事は、「世界・歴史・経済的利害関係の複雑な絡み合い」の中で起こる。このことを感じ取ってもらうのが今回の目的であった。



3. 感想

1 コマ目（8:40-10:10）という早い時間帯でありながら、なかなか出席率が良かった点は受講者の賞賛すべき点である。感想文からも、熱心に聴講してくれていたことが読み取れることには感謝したい。

私は大学院生の間、計 10 年ほど、某大手予備校で講師をして糊口をしのいでいた（世界史、英語）。予備校業界は生徒数の減少もあって激しい競争の世界となっており、非常勤の講師としては「ブラック」な職場でもあったが、そこで身についた「話法」は大学の講義でも有効に思われる（少なくとも一部は）。予備校的手



法を大学に持ち込むのは必ずしも良いこととは思わないのだが、講義全体の前半部分（第1～7回ほど）では意識的に行ってきた。

- ① 伝わり易さの重視： 内容を単純化し、「ストーリー」のある形にする（回を重ねる毎に複雑化させる。初回付近は「腹八分目」以下の情報量を心がける）。
- ② 関心の喚起： 「受講生自身との結び付き」を意識させる。受講生の先入観を予想して問いかけ、できれば先入観をひっくり返してみせる。
- ③ 板書重視： 手を動かせることで集中させる。プリントを渡す場合、それだけでは講義内容を再現できないようにする（→出席率が維持される）。ただし板書は少なすぎず・多すぎず（約5行×6で限度）。
- ④ 娯楽性： 30分に1回は軽い笑いを入れる。冗談は受講生の記憶の補助になる（→「笑った」という意味での「面白さ」であっても、講義内容への関心に繋がりやすい）。

これらの要因が奏功して、受講生がさらなる文献へと進んでくれればと願う（予備校講師のしんどかった日々が報われます）。

「ヨーロッパ経済論」の講義を受け持って4年目。毎年講義内容をバージョンアップしてきたが、ほぼ同じ内容を話しても非常にウケの良い時と全然反応が帰ってこない時がある。想定外の箇所に関心が集まったり、意図が全く異なる形で伝わっていたり、逆に思いもしない鋭い指摘をもらったり、と、講義をするのが楽しみである。どうしてもっと（受験直前の予備校生くらいに）関心を持ってもらえるか、最大の課題である。

第3回授業公開

授業者からの報告.....

1. 授業の概要

地域社会学はⅠ・Ⅱの二つのパートによって編成されている。1970年代に生まれた学問領域としての地域社会学の問題意識を継承しつつも、グローバル化する現代社会の諸課題や学問領域を横断的に結びつけた授業内容となっている。キーワードは、グローバル化（地域社会学Ⅰ）と多文化化（地域社会学Ⅱ）である。また、社会学的なアプローチとしては、私的問題と公的問題を結びつけることによって、社会学



的想像力を養うことを軸としている。かつて機械が人の手に取って変わった時代からコンピューターが人の脳に取って変わっていく時代へと変遷している現代社会において、コンピューターが苦手な人間（「他者」）への想像力を養うことは決定的に重要である。そのために、言語を通じてモノを考える能力とともに、映像や音楽を通じて感性を磨きあげていくことを重視している。授業全体のデザインは、導入部分であるイントロダクション、第一部（身近な世界の多文化化）、第二部（地域社会の多文化化）、第三部（映像とフィールドワークから見えてくる地域社会の多文化化）、最後にまとめという構造になっている。

2. 当日の授業

公開授業のテーマは、第一部の第二回目で「多文化化する食生活——エスニックフード」である。そこでまず、食文化は①混淆的な性質を持っていること、②食文化の変容の背景には人の移動と歴史・社会的背景があること、③上記二点を踏まえてそれがグローバル化する現在においてどのように展開しているのか、という3つのポイントを軸に講義することと、「あなたが好き／嫌いな料理は何ですか？具体的な例をあげ、それがどのような歴史・社会的なルーツをもっているものなのかを調べてください」というワークシートの問いを念頭に置いてもらい、パワーポイントやYoutubeの映像などを用いて、膨大な量の食べ物の写真や映像を流しながら講義した。まず、冒頭において、私の個人的な食をめぐる記憶を事例に、それがいかなる歴史・社会的な背景を抱えており、植民地主義や戦争といった公的な問題と結びついているとともに、記憶と結びついたイメージというものは、新たな事実を知ることによって変容するものであることを示した。次に、学生の日常の食をめぐる風景から食をめぐる多文化化の状況についての認識を問い直すために、生協の食堂で撮影した写真を用いることにより、改めて私たちが「日本食」というふうに考えているものは何なのかを確認し

た。これらを踏まえて、私たちが「日本食」の一部として食しているものがどのような来歴を持っているのかを、力道山やアントニオ猪木といった越境を経験した人びとと食のつながりやその背景となる歴史・社会的背景を確認した。これらの歴史・社会的背景を踏まえたうえで、それがグローバル化する現在どのように広がっているのかを東京や関西のチャイナタウンやコリアタウンのフィールドワーク

で撮った写真を見ながら検討した。最後に、これも私の個人的な経験や記憶と結びつけつつ、韓国料理であるスンドゥブのグローバルな軌跡を辿る（韓国からLAを経て生協食堂へという道）ことによって、私たちの食をめぐる多文化的な状況を認識してもらうとともに体感的に理解してもらった。



3. 検討会から

検討会においては、まず今回の授業の全体のなかにおける位置づけが確認された。概要で述べたように、この授業では、従来の地域社会学という枠組みを越境して、グローバル化時代における地域社会の変容と人の移動を考慮して独自のデザインを施したものであることを確認した。また、成績評価において大部分を占めるワークシートの内容について説明をおこなった。学生は URL からパワーポイントなどのすべての授業資料およびワークシートをダウンロードし、授業の冒頭に出されるワークシートの問いに毎回答え、最終的に自分が一番関心の高いテーマを授業最終回に行う最終コメントの記述で行ってもらうという方針を確認した。また、授業では多くの事例や理論的な問題などを扱うが、すべてを包括的に記憶するのではなく、自分の関心にひきつけて学生がピックアップして考えることによって、想像力を涵養するという方針を示した。自立している学生への信用をベースとして、学生たちが主体的に学ぶことを前提とした授業のデザインであり、手軽に「わかりやすく」理解してもらうことよりも、長い時間をかけて問いを持ち続けてくれるような授業となることを目指していることを述べた。このことと関連して、FD の授業公開の取り組みについては、学生の様々な要望に応えることが、ともすれば学習塾的な「わかりやすさ」となってしまうのであれば、情報化時代における知識生産に必要なスキルを身につけることとは逆行してしまい、皆が横並びで同じような知識を共有してしまうことに対する問題意識を述べた。最後に、授業の改善点は無数にあると受け止めているが、この授業は今年が初めてなので（自転車操業中）、今後継続していく中で改善していきたいことを伝えた。

第4回授業公開

授業者からの報告

1. 授業の概要

この授業科目は小学校 1 種免許状取得者の必修科目（指導法に関する科目）にあたります。受講学生は約 60 名（受講調整済）で、4 名の教員が授業を分担して実施しています。受講学生の多くは 2 年生であるため授業実践は未経験で、理科指導に関しても初めて学びます。そのため、小学校理科の授業づくりを理論的かつ実践的に一通り経験し、今後に向けた自己課題を明確にすることがこの授業科目の大きなねらいとなります。



ねらいを実現するため、2つのサブクラスに分け、模擬授業と講義・演習を交互に実施する体制をとっています。クラスサイズを小さくすることで、小・中学校の理科室をイメージし整備した人間発達文化学類棟 人 617 教室（定員 30 名）の利用を可能にし、理論と実践の両面からの学びを保証できるようにしています。

今回は模擬授業を公開授業の対象とし、小学校 4 年生 地球領域「水のすがたとゆくえ」に関する内容を取りあげました。模擬授業はルーチン化しているため、標準的な時間配分である、事前説明・準備：5 分、模擬授業：45 分、児童役による評価カード作成：10 分、グループ協議：20 分、複数教員からのコメント：10 分で実施しました。

2. 授業の工夫

学生が能動的に学ぶきっかけづくり

模擬授業はグループ単位（基本 5 人構成）で実施し、その際 2 つの条件をクリアするように求めています。一つは「指導者役を途中で適宜交替し一連の授業として実施する」ことです。協同して授業計画を立案し担当箇所を分担することで、グループワークの必然性を生んでいます。もう一つは「児童役が実験・観察（宿題としての事前観察も含む）を行う授業を実施する」ことです。実際に教具にふれて予備実験を行ったり、学内で見られる自然現象を探索したりという過程を生み出し、安全管理や対象教材の本質など、小学校理科の専門的な知識・技能の学びを促すことに寄与しています。

主体的な学びを支援するしくみ

前述の内容は、プロジェクト学習（Project Based Learning：PBL）として課外で多くの時間（2～3 ヶ月程度）をかけ実施します。しばしばグループワークが停滞することもあるため、グループごとに担当教員を決定し、2 回以上の事前協議を持つようにしています。協

議では、教材の特性や児童の考え方などを教員がアドバイスして、グループにおける検討の質を高めるとともに、PBL が上手く進むように支援しています。

また、専用の支援 LMS (Learning Management System) を開発・運用し、学習指導案作成などグループでの協同作業を web 上 (PC・スマートフォン対応) で実施できるようにしています。

省察を促すための機会づくり

コミュニケーション機会を増やし、他者との議論を通して自身が持つ児童観・教材観・授業観を表出 (形式知化) することで、深い省察を促し自己課題を見いだせるよう努力をしています。例えば、模擬授業後の事後協議において、自身が書き起こした受講カードの内容を基に協議を実施したり、メンバーを入れ換えて協議することで新しい考え方に触れられるようにしたりするなどの工夫をしています。複数教員によるコメントも、研究者・実務家教員双方の視点で多様な価値観を育むため取り入れています。

この他、支援 LMS でも省察に必要となる材料 (協議結果、児童役による評価カード、板書画像、自身の授業ビデオ など) をライブラリの形で提供し、自己の振り返りをより充実した深いものにできるよう配慮しています。

3. 今後の課題

2 年間にわたり PBL 型アクティブ・ラーニング (PBL - AL) と ICT 活用を組み合わせた授業を進めた結果、以下のような課題も見えてきました。今後、継続して検証を進め、対応策を検討していきたいと考えています。

1. PBL - AL の実施は学生・教員の負荷に見合った効果 (特に長期的) があるか
2. PBL や模擬授業での取り組みをどのように評価するか (ルーブリック作成など)
3. グループワークのサポートをどのように進めるか (フリーライダー問題、協同作業の不成立、TA・SA がより有効に機能する場面づくり など)
4. 支援 LMS が与える様々な影響をどのように捉えるか (PC 等に苦手意識がある者の中には、スマートフォンだけで課題を仕上げる者がいる など)



受講学生による模擬授業



模擬授業後のグループ協議